

## 【技術名】疎植栽培

# 疎植栽培は慣行栽培と同等の 収量、収益の確保が可能です！

### 【技術の要約】

「あきたこまち」、「コシヒカリ」、「ひとごち」は50株/坪（15株/m<sup>2</sup>）、「ゆめしなの」は60株/坪（18株/m<sup>2</sup>）までの疎植栽培が可能で、慣行の栽培と同等の収量、収益が得られ、規模拡大の一助となります。

### 【技術の内容】

- 1 各品種の適応標高において、「コシヒカリ」、「あきたこまち」、「ひとごち」は50株/坪（15株/m<sup>2</sup>）まで、「ゆめしなの」は60株/坪（18株/m<sup>2</sup>）までの疎植栽培が可能です。
- 2 移植期は、各地帯における適期の範囲とします。
- 3 疎植栽培により慣行栽植密度並の収量、収益が得られ（図1）、育苗スペースの余剰活用により移植作業の受託の拡大や経営面積の拡大が可能となります。

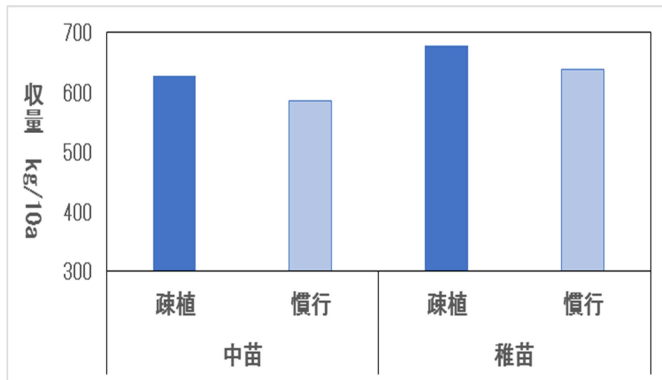


図1 栽植密度(疎植(50株/坪(15株/m<sup>2</sup>))、慣行(70株/坪(21株/m<sup>2</sup>))による収量の差(コシヒカリ)(農事試験場)

表1 栽植密度(疎植(50株/坪(15株/m<sup>2</sup>))、慣行(60株/坪(18株/m<sup>2</sup>))による使用箱数と所得の差(コシヒカリ)

	使用箱数 (箱/10a)	所得 (円/10a)※
疎植(50株/坪)	14.7	50,381
慣行(60株/坪)	16.2	48,867

平成22・23年大町市における試験結果の平均値

※所得=売上額-生産費用

### 【留意事項】

- 1 この技術は、平成23年度普及技術です。
- 2 茎数確保が遅れ、総籾数が不足した場合は減収するので、特に高標高地域では健苗の移植、適正な水管理が必要です。
- 3 「美山錦」は疎植による減収程度が大きいので、栽植密度は慣行の栽植密度とします。
- 4 施肥量は慣行並みとします。特に、高標高地域では減収につながる所以減肥は避けます。
- 5 疎植栽培を行う場合、品種、地帯にかかわらず葉色が濃く推移するので、常習発生地域ではいもち病の発生に注意が必要です。
- 6 移植時の欠株防止のため、事前に田植機のかき取り量、爪の調整を十分に行ってください。
- 7 標高が高い地域において、「あきたこまち」の粒大がやや小さくなる事例があります。